

“臨床に役立つ”臨床推論というタイトルが示すように、理学療法における日常の臨床で常実践している臨床推論の骨格についてあらためて整理することとした。

直感の特性と論理的思考に基づく臨床推論の枠組み、救急ならびに地域医療という現場におけるダイナミックな臨床推論の実際、暮らしている人を対象とするケアの視点を重視した臨床推論について解説していただき、理学療法の臨床推論に重要な論理的思考の明示化と奥深さを考える機会とした。

■臨床に役立つ臨床推論の実際(野村英樹論文)

ヒトの意思決定には、大きく論理的思考過程と直観的思考過程の2種類があるが、ベテランになるほど直観的思考過程を多用することが知られている。クリニカル・リーズニングは、初心者にとって論理的思考過程のトレーニングとなり、ルール・ベースのパフォーマンスへの移行を促す方略となるが、同時に、ベテランによる直観的思考過程の誤りを検証し軌道修正を図るための方略としても有用である。

■救急・災害医療における臨床推論の実際(小早川義貴, 他論文)

救急医療においては、重篤な疾患の見落としを防ぐこと、治療と診断を並行すること、経過観察も重要であることなどが臨床推論を行ううえのポイントである。災害医療においては、情報から、起こっている事象を推定することが難しい場合も多い。救急・災害医療分野ではさまざまなシミュレーション学習の機会があり、これらの活用は臨床推論能力の向上につながると考えられる。

■地域在宅医療における臨床推論の実際(齋木 実論文)

地域在宅医療においても、医療機器の進歩や多職種連携により、さまざまな医療を行えるようになってきた。しかし、特に在宅では限られた社会資源のなかで「できることとすべきこと」をよく吟味して行う必要がある。本稿では、在宅医として他職種、特に訪問理学療法士との連携事例を取り上げ、終末期の在宅患者に寄り添うプロフェッショナルのあり方を考える。

■看護における臨床推論・アセスメントの進め方―「生きている」「生きていく」(山内豊明論文)

看護ケアの本質は「生活を支え」「生命を守る」ことである。「生きていく」ための機能のアセスメントのゴールは生活であるため、対象者の生活自体に答えがある。一方、「生きている」に関係するアセスメントは、対象者からの訴えにかかわらず観察者の計画に従って確認する必要がある。臨床推論の際には、①目的志向、②優先度を考慮、③細部の観察と全体像の把握、④除外診断的な進め方、が鍵となる。